

『釈浄土群疑論』における

別時意趣会通について(その二)

——別時意趣とは何か(インド・チベットの文献を中心として)——

村上真瑞

別時意趣とは、『撰大乘論』、『撰大乘論世親釈』、『撰大乘論無性釈』、『大乘莊嚴經論』、『大乘阿毘達磨雜集論』、『大乘阿毘達磨集論』、『瑜伽師地論』等の論釈において説かれている懈怠な者を如実なる修行に導かせるための方便とも考えられる見解である。そこで、まず別時意趣の起源を漢訳前の原典からさぐってみよう。

まず最初に『大乘莊嚴經論』‘Mahāvāna-sūtrāṅkāra’長行釈において、
/Vimalacandraprabhasya tathāgatasya nāmadheya-grahaṇa-nātreṇa niyato bhavaty anuttarāyān samyaksaṃbodha/ ①

「無垢月光如来の名号を誦持することによって、無上なる正等菩提に決定した者となる。」

と説かれ、また、

/Ye Sukhāvayān prañidhānāṃ karisyanti te tatopapadyanti/ ②

「およそ極楽に対して誓願をなすであろう者は、かしこに往生するであろう。」と説かれ、懈怠という障害を対治する教説として別時意趣(kālantrāhipraya)を説明している。次に『撰大乘論』‘Mahāvāna-saṅgraha’において「別時意趣」(dus gshan la dgeṇs pa) は次のように説かれる。

/de bshin gśeṅs pa Rin chen mañ gi mshan gzun bas bla na med par yan dag par rdzogs pañi byañ chub tu nes par bgyur ro/ ③

「多宝如来の名号を誦持することによって無上なる正等菩提を確かなものとするだろう。」

/smon lam brab pa tsaṃ gyis hjiṅ rten gyi khams Dde ba can du sbye bar bgyur ro/ ④

「極楽世界に」誓願をなすことのみによって、極楽世界に往生するのである。」と説かれる。そしてこの説は『撰大乘論』世親釈‘Mahāvāna-saṅgraha-bhāṣya’において、次のように解釈されている。

「別時意趣と称するものにおいては、懈怠の性質の多い者たちすべてをして、そ

の〔仏説の〕仕方をもって、その〔如来の〕教法に対して努力せしめるのである。すなわち『如来の名号を誦持することに基づいて「懈怠なる者に」善根が増長するということから、それら〔善根〕が勝れた位への向上の因(gyiṅ kṛāna, hetu)となるということこそを意趣しているのであり、ただ名号を誦持することのみで「ただちに」決定し確定して無上なる菩提を得るということではないのである。次の例の如くである。すなわち『一パナの金銭は千パナの金銭を成す。』という慣用的言い表わしでは、「千パナを成すのは」一日によってなのであろうか、「そうではない。』別の時に、(gshan du: kālantrāṇa)という意味なのである。一パナとは、それがまさに千パナ〔を成すため〕の因となるということである。また『誓願をなすことのみによって極楽世界に往生する』というのも、この例の如くに解すべきである。」(向井亮氏訳)

ここにおいて、「誓願をなすことのみによって極楽世界に往生する。」という仏説については、解説を省略しているが、この説についてはすでに『撰大乘論』以前の瑜伽唯識学派の論書である『瑜伽師地論』において次のように説かれている。

「諸の菩薩の教説の中に『菩薩にして誰でもかしこ〔の清浄世界〕に心をもって誓願をなす者は、すべてかしこに往生する』とあるのは、いかなる理由で説かれたのであるか。答える。教化されるべき懈怠な性質の、いまだ善根を積んでいない者たちのために、意図して説かれたのである。すなわち、その者たちは勧励されるならば、懈怠を捨てて、善法に対して精進努力し、それより、漸次に(rim gyis: kramena)かしこに生まれるといふ本性を至得した有資格者となるからである。したがって、先〔の教説〕における密意とは、この点にあると知るべきである。」(向井亮氏訳)

ここにおいて説かれている内容については、前に述べた『大乘莊嚴經論』長行釈や『撰大乘論』世親釈と比較して、往生すべきところとして「清浄世界」が出され、極楽とは限定されていないという相違はあるが、「漸次に」という「別の時に」に相当する語が見出されることによって、別時意趣と同じ主旨であることが理解される。したがって、別時意趣とは、要約すれば、如来の名号を誦持したり、極楽に対して誓願をなしても、すぐに菩提を得たり極楽往生ができるのではなく、やがて別の時に成満されるべき、それらの因となるというところにこそ真の意味があり、誦持名号即決定菩提、および発願即往生極楽のように説かれるのは、本来即では接続できないものである。これはあくまでも懈怠な者を如実なる修行に導き上げさせるための特別の意図をもった方便誘引の教説なのである。よって、漢訳以前の『大乘莊嚴經論』、『撰大乘論』、『瑜伽師地論』などを所依としている瑜伽唯識学派においては、誦持名号や

発願のみで菩提を決定することができるとか、極楽に往生することができるなど説くところの浄土教的教説は、方便の教説であって、本来すぐさま決定菩提や極楽往生はできず、その方便にはげまされて行を頼むことによって、やがて別の時にならねば決定菩提、往生極楽ができないのであると説かれるのである。

さて、一方で別時意説を説く世親が、他方では『無量寿経論』において、

「世尊我一心帰命尽十方無礙光如来願生安樂国」^⑦

と説かれるように、発願により往生極楽せんとする思想を説くのはなぜであらうか。

それについては『無量寿経論』においては、往生極楽に至る行として、止観双運行を根幹とする五念門が説かれていることに注目し、この発願自体も *prapñdhana* が有する *vehement desire, vow* 等に意味に *deeply, profound religious meditation* するなわち深い宗教的禪定の意味にまで高められていることに注目されねばならない。このことについては、すでに拙論において述べてあるので、詳しく述べることはしないが、『無量寿経論』における発願は、

「云何作願心常作願。一心専念畢竟往生安樂国土。欲如実修行奢摩他」^⑧

と説かれるように、安樂国土に往生せんと願をなすことがそのまま如実に奢摩他の行を修行しようと欲することであると示されている。そして、五念門の根幹である觀察門においては、

「云何觀察。智慧觀察。正念觀彼。欲如実修行毗婆舍那故」^⑨

と説かれるように、智慧によるところの、阿弥陀仏の依正二報—三種二十九句の莊嚴の觀察こそが、毗婆舍那の如実修行であるとされている。このように『無量寿経論』においては、瑜伽行に準じた止観双運行を浄土教にとり入れ、絶対的對境である阿弥陀仏の依正二報を觀察の對境としたところに独自性があり、また、この五念門を説くことによって、世親は別時意ではない、本来の浄土教とは止観双運を中心とした五念門を行じ、面の当りに極楽の依正二報を觀察することによってこそ、極楽に往生することができるのであるということを示したのであるということができよう。

では、以上述べたような別時意説が中国に伝来されて、いかなる方向に進んでいったのかについては、次号において考察してみたい。

註① *Mahāyāna-sūtrālmkāra*, ed. S. Lévi, p. 83 ll. 23~24.

② *ibid.*, p. 83 ll. 4~5, 23.

③ '*Mahāyāna-saṃgraha*', ed. E. Lamotte, p. 41. ll. 11~13.

④ *ibid.*, p. 41, ll. 13~15.

⑤ *Tib. Trip. Vol. 112 pp. 290-1 ff.*

⑥ 『大正藏經』二六卷二三〇頁。

⑦ 『モニエル梵英辞典』六六〇頁。

⑧ 『世親の別意説について』拙論（『仏教論叢』二七号）。

⑨ 『大正藏經』二六卷二三一頁。

⑩ 同右 二六卷二三一頁。

ekam samayan ㄅ ekasmin samaye

の相違をめぐる——問題提起と作業報告(1)

南 清 隆

問題提起

仏教經典の劈頭を飾る定型句、つまり漢訳では一般に、
如是我聞一時仏在……

と訳される文句は、パーリ (=P) ニカーヤでは言う迄もなく、

Evam me sutam ekam samayan Bhagavā...

であり、一方サンスクリット (=Skt) 文獻の多くは、

Evam mayā śrutam ekasmin samaye Bhagavā...

と記される。いずれにしても、意味の上からはこれに続く説示内容が仏陀直伝であることを權威づけるためには經典に必須の文句であることには変わりない。そして、この定型句の問題点については、既に John Brough 氏によって指摘され研究が加えられている^①。彼は、そこで次の三点の問題を提起し論述する。

- (1) 文中の *ekam samayan* (Skt *ekasmin samaye*) が前後のいずれにかかるのか。^②
- (2) P では対格 (=Ac) の *ekam samayan* が、Skt では於格 (=Loc) *ekasmin samaye* で表現される相違。
- (3) 全体的な内容の問題。

これらのうち特に(2)の点について、筆者が有している素朴な疑問を端緒として再検討を加えるための資料を混えて若干の考察を試みたものが以下の拙稿である。

P の Ac 形 *ekam samayan* と Skt の Loc 形 *ekasmin samaye* と、漢訳の「一